

お礼にかえて

久保田 政純

私の経歴は日本興業銀行、和光証券、更には海外進出や企業再生などの経営コンサルタント業務と実務経験が長く、その後教職を兼務するに至った。そのため学問においては常に実務に即する一方、理論のない実務の脆弱さも忘れることなく両者の折衷を心がけてきた。

まず学問と実務の中心であった企業審査であるが、財務分析については従来の比率分析を脱し、回転期間を柱とする動態分析及びキャッシュフロー分析を重視する手法を確立した。また定性分析面では経営者を定量的にも評価する方法を提唱した。次に設備投資について従来は単なる経済性計算に研究分野が限られていたが、計画の立案から事後監査まで実務に裏付けられた実証研究を進めた。この間恩師諸井勝之助先生の指導の下コーポレートファイナンス分野の学問領域に進みポートフォリオ理論、MM理論、オプションなど苦労しながらもその基礎を修得した。

さらに、海外での審査教育を長く続けていた関係もあり、日本では新しい学問分野である国際財務の研究に進んだ。麗澤大学出版会のご支援を得て、本邦では初の国際財務の世界的に最も著名な教科書 *Multinational Business Finance* 12th ed. を翻訳出版できたことは大変ありがたいことと感謝している。現在東京研究センターで国際ビジネスファイナンス研究会を隔月開催し、本学からは真殿、清水および上村先生のご参加を得て議論を深めている。単に国際財務のみならず広くエネルギー問題なども研究しており、いずれ成果を提言できるような段階まで持っていきたい。今後この分野は多国籍企業の財務活動の理論的支柱となるべきもので、極めて重要かつ時宜を得たものと自負しており、将来本学がこの分野のさきがけになることを大いに期待しているので各位のご協力をお願いしたい。

退職後の計画であるが以前から続けている企業審査や企業価値評価などの社会人教育を継続する一方、企業審査、設備投資、キャッシュフロー分析および国際財務に関する最終的な完成版の出版を行いたい。また日本のメディアの表面的かつ自称リベラルな傾向に飽き足らず、雑誌『実業界』にかねてより政治・経済の辛口コラムを連載しているのでこれも可能な限り継続したい。

退職にあたり、この6年間教育と研究の貴重な機会を与えていただき心から

感謝申し上げたい。なお末筆ながら、この場を借りて今後の本学の隆盛を願って若干率直な助言をさせていただきたい。まず、すれ違ってでも挨拶ひとつ出来ない教員も散見されるので、教員、学生ともども一層のモラル向上を図る必要がある。学生の質の低下を嘆く声が多いが学生と教員の質は高い相関関係にある。次いでカリキュラム編成、特に経営学科であるが育成したい学生の将来像が見えず、散漫かつ教員の好みに合わせた実質がないものがある。本学のレベルであれば実務の基礎となる科目に絞り徹底的にそれを習得させる寺小屋方式が一番適している。当然のことながら、いい教科書を必ず採用する一方、宿題を毎回課すべきである。短期間でもいいので全寮制も検討に値する。いずれにしろ、もう少し実業界や他大学など外の世界に目を向け真摯に意見を聞くべきであり、唯我独尊ほど進歩を妨げるものはない。教職員一体となって、現状を正面から受け止め自己革新を進め、モラルは勿論、学業の上でも尊敬される大学になれんことを心から切望してやまない。

短期間ではありましたが大変お世話になりました。どうもありがとうございました。